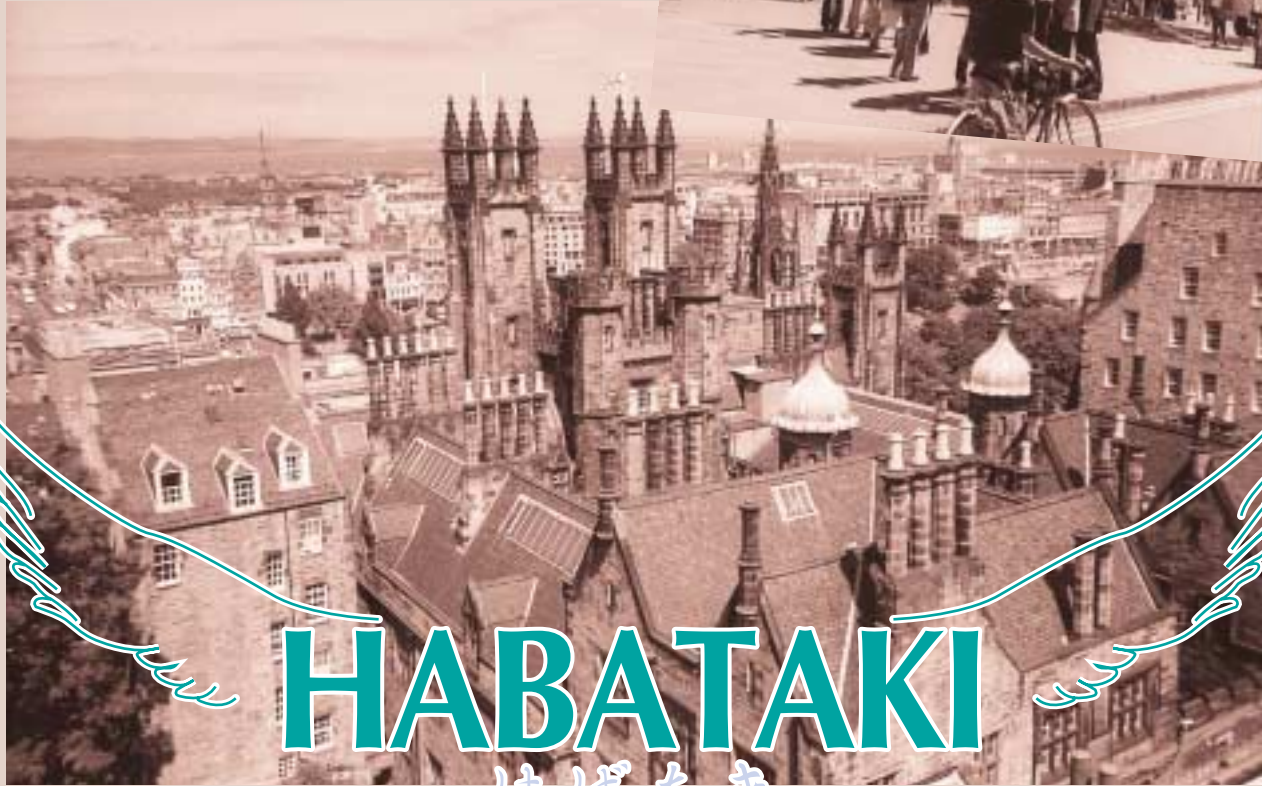
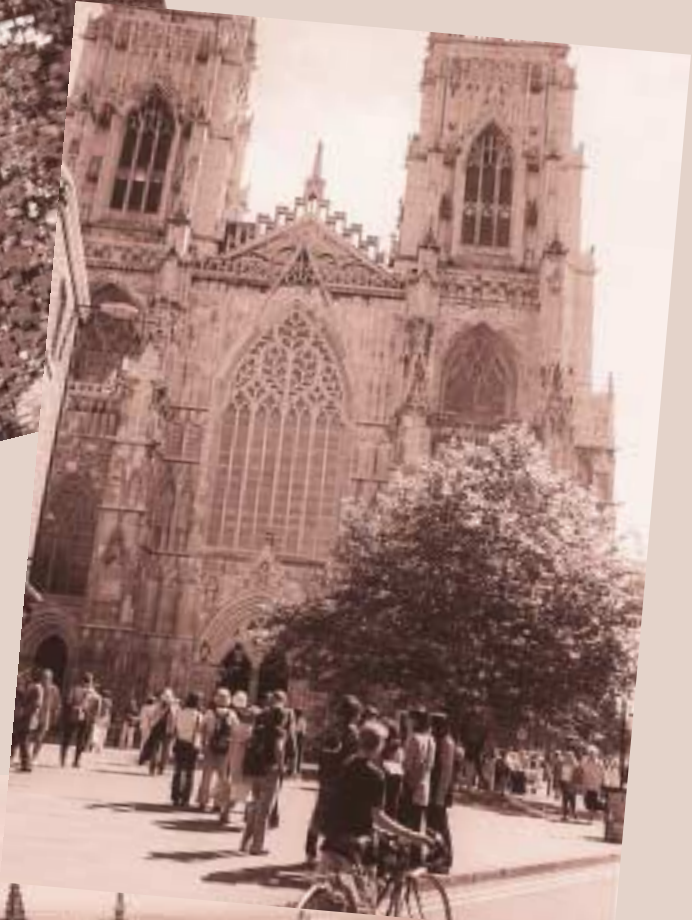


VOLUME

75

JANUARY

2001



# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 Japan

inside NEWS



## ニューキャッスル大学夏期語学研修に参加して

本学と学術交流協定を締結しているニューキャッスル大学で、毎年短期語学研修が開催されている。本学より29名の学生が参加したが、国際関係学部の林 範子さんに研修の感想を寄せてもらった。

国際関係学部 国際関係学科 2年 林 範子

ニューキャッスルで過ごした1ヶ月、それは私にとって今までで最も充実していた1ヶ月であった。英語を聞き取り英語で考え英語で話す、全てコミュニケーションの手段は英語であった。他国特にヨーロッパ諸国出身者の会話力の高さとの英語力の未熟さの差に、最初の2日間はため息ばかりついていたが、日本人同士でも英語で話そ

うと決めるなどプラス思考で努力した。

授業は会話・文法・読解・聞き取りいずれの力も向上させるために様々な工夫されたものであった。特に週3回あるオプションでは自分の興味に応じて5つ位の科目の中から選択し、新聞社を訪ね新聞の製作過程について説明を聞きながら、間近で見ることができたことは貴重な体験であった。また地元の人々へインタビューをしたことは、イギリス英語独特の発音とアクセントの強さに戸



ニューキャッスル語学研修参加者集合写真

～教室のある建物マーズコート（Merz Court）の前にて

表紙写真説明 左上 ニューキャッスルの街並み

左上 週末旅行で訪ねたヨークのヨークミンスター（York Minster）

下 週末旅行で行ったスコットランドエジンバラの街並み

惑いつつも人々の温かさを実感でき、印象深かった。

授業だけが英語の勉強に繋がるのではなく、週末旅行もまた充実していた。湖、山、羊の群がる大草原、たくさんの自然に囲まれ癒されるようなどかな湖水地方、世界最大面積の中世に作られたステンドグラスや装飾的ゴシック様式の回廊を持つ壮大な大聖堂があるヨーク、イングランド北部の18世紀初期の生活ぶりを体験できるようなビーミッシュ、スコットランド民謡が響き渡りスコットランド、イングランド統合の歴史をみることができたエジンバラなど、英語とともにイギリスを知る興味深いものであった。

ニューキャッスルで出会った友人との思い出も尽きない。サウジアラビア出身の友人と互いの言語を紙に書いて教えあったこと、台湾出身の友人と互いの言語をしゃべりあったこと、韓国出身の友人と日本のアニメーションの歌を歌ったこと、スウェーデン出身の友人と互いの国の歌を教え合い歌ったことなど彼らと過ごした時間は忘れられない。また、私の友人が日本から持ってきた線香花火を夜、学校の周辺で一緒にした時の彼らの喜びようも忘れられない。日本に対する先入観は、台湾から見るとシャイで働きすぎであり、ドイツから見ると集団行動を好み、英語文法力は強いが会話力が弱いという話が授業で上がったことを台湾の友人から聞き、異なった視点から日本のイメージを認識することもでき興味深かった。寮での生活もまた、週末旅行と同様に同じクラスでない人とも交流できる場であった。スウェーデン出身の友人と互いの母国料理を交換しあうことを決め、近くの中継街などで材料をそろえ、時間がかかりながらも肉じゃがとそうめんを作りみんなではしを使って食べたことは楽しい思い出だった。また、ドイツ出身の友人の誕生日パーティを開き、みんなで祝うなど寮ならではの時間を過ごせた。

私と同じ位の年齢の娘がいて、コンピュータ技術を学ぶ研修の一環としてこの語学研修に参加したキルギスタン出身の人、短期研修終了後に4ヶ月イギリスに残り英語を勉強する韓国出身の人、

44歳でありながら辞職後大学で勉強をしているドイツ出身の人、様々な幅広い経験を持った世界各国の人達と、英語を学ぶという同じ目的を持つゆえにニューキャッスルという同じ大学でたまたま出会った。出会いは偶然であっても、同じ場所と同じ時間を過ごし思い出をつくれた私達はみな各々の国で、現在異なる生活を送っていても、手紙やメールを送りあったりと一部の友人とであれ交流は続いている。

英語は世界の共通語だとは言え、英語を学ぶという同じ目的が皆との出会いをもたらした英語という普遍的な言語によって私達はコミュニケーションを図ることができた。1ヶ月という短期の語学研修であったが、英語力の向上だけではなくそれ以上に得るものが多かった。ぜひ1人でも多くの人が短期間であれ、日本を出て他国の人と交流する機会を持ってほしい。目の前のことに急ぎ立てられ忙しい毎日に追われて気づかない何か、忘れてしまっている何かを認識することができると思う。きっと得るものは大きいはず…。



週末旅行で訪ねたビーミッシュ (Beamish)

## 県立大生の韓国遠征ゼミナール

朝鮮半島の地域研究(主に社会、文化分野)を研究テーマにしている小職のゼミナールでは、昨年11月19日から23日にかけて韓国遠征ゼミを実施した。前年度に続いて2度目である。日本人特派員(黒田勝弘・産経新聞ソウル支局長)を講師とする勉強会(ソウル留学中の本学の学生・関係者も参加)、韓国大学生との合同ゼミとホームスティが主な内容である。釜山にある東西大学外国語学部日語日文科の学生との合同ゼミでは、この間、双方のゼミで同一のテキスト(鄭大均『韓国のイメージ』、『日本の(イルボン)イメージ』いずれも中公新書)を教材としてきた成果を発表し、討論を行った。全額私費と各自の自己責任による参加であり、学校行事ではないが、学生諸君にとって多くの示唆を与えたようである。以下は参加した9名の学生のうちの2名の訪韓後の感想文の一部である。

(国際関係学部助教授 小針 進)

### [合同ゼミについて]

国際関係学部 国際言語文化学科4年  
島 将之

私は今回、司会をやらせてもらったが、何か機転をきかせて円滑に討論を進めさせることの大切を知った。いつでも入念な準備ができるわけではない。諸外国との付き合いにおいては、そのような時にこそいかに立ち回れるかが重要であろう。韓国側には、自然体で振る舞う、そして相手を緊張させないという点において、合同ゼミの界

困気を穏やかにする機転が多かったように思う。外国の大学との合同ゼミ開催は貴重である。

そして、東西大の学生たちの日本語能力には本当に驚かされた。われわれ日本における韓国・朝鮮学と韓国語学習者にとって、多くの韓国側学生が流暢に日本語を話す姿は刺激的であった。これは日本に対する関心の高さから来る熱意でもあるだろう。良い意味でも悪い意味でも韓国にとっての日本とは抜き差しならぬ国であると実感できた。

日韓双方の学生は鄭大均・東京都立大教授の『韓国のイメージ』と『日本(イルボン)のイメージ』をテキストにして討論したが、良い選書であったと思う。日本人にとっての韓国イメージ、韓国人にとっての日本のイメージが、それぞれどのような相互作用によって醸成されたのかを非常に鋭い視点で捕らえている。

日韓関係における多くは、双方のイメージによって問題そのものが実態以上に大きくされてしまったり、問題の方向性が変質してしまう場合があ



韓国大学生との合同ゼミナール

る。日韓両国にとって、互いをどう眺めあってきたか、そしてこれから両国はどう向き合っていくべきかを考えることは、日韓双方において重要なことであると合同ゼミを通じて再認識した。

[ ホームスティについて ]

国際関係学部 国際言語文化学科3年  
水谷しのぶ

当初、釜山でのホームスティは期待よりも不安のほうが大きかった。パートナーと気が合わなかったらどうしよう。家庭で出されたご飯が口に合わなかったらどうしよう。合同ゼミ終了後、パートナーと初対面した。ヘジュという名のおしゃれな女子学生が現れた。もの静かな感じの子で、私

は少し戸惑った。私みたいなおしゃべりとは気が合いそうもないと思った。ところが、話し始めると気さくな子だとわかった。3歳年上の彼女は「敬語なんて使わなくていいよ」とも言ってくれた。われわれは数分で打ち解けた。

家庭ではヘジュの家族から歓迎を受けた。夜は様々なことを話し込んだ。私は韓国語を2年半も県立大で勉強してきたがモノになっていないので、彼女の日本語の堪能さには刺激を受けた。そして何よりも、彼女が自国の経済問題などについて真剣に話していた姿にはかなりの衝撃を受けた。年齢が変わらないのに世の中のことを日常的に考えている。私も遊んでいる場合ではないと心を新たにした。



日本人特派員を講師とする勉強会

## 大学院国際関係学研究科の動き

大学院国際関係学研究科長 小浜 裕久

本研究科には、国際関係学専攻と比較文化専攻の2つの専攻が置かれている。教員と院生は、国際政治、国際経済はもとより、国際行動学、社会学、文化人類学、諸外国の文学・語学、地域研究

など、国際関係の動向と直結する様々なディシプリンの学問を勉強・研究している。分野が広範であるだけに、学生は授業を選択する段階で、学際的及び地域的な思考方法が身につくものと思う。

本研究科は、国際化の進展にともない、高度な専門的知識と技術を身につけ様々な国際化社会で活躍できるスペシャリストの養成を図ること、そして、国際的視野に立った研究教育を行うことを理念として、1991年に発足し、10年が経とうとしている。

グローバル化が進む現代の世界では、軍事力、経済力、文化の力など様々な要素が外交に影響を及ぼしており、様々な力を背景に国際社会の一員として行動していくことがますます重要になっている。本研究科の教育においては、研究や知的交流の充実、知的営みの国際化が一層必要となる。

平成12年3月、国際関係学研究科からは10人の学生が、就職あるいは他大学院博士課程への進学へと巣立っていった。10人のうち5人が中国、韓国からの留学生である。本研究科の知的訓練を乗り越えた修了生が巣立っていく姿を見て安堵すると同時に、彼らが仕上げた修士論文や社会での評価が、そのまま本研究科を写す鏡になるということ、我々教員は銘記しなければならない。本研究科が発足して以来、こうした思いは続いている。

現在の在學生は、修士2年が15名。うち国際関係学専攻が3名、比較文化専攻が12名である。こ

れら15名のうち4名が韓国、中国からの留学生である。修士1年も15名が在籍しており、うち国際関係学専攻が7名、比較文化専攻が8名である。これら15名のうち11名が中国、カザフスタン、韓国、ベトナム、モンゴルからの留学生である。平成12年9月末に行われた入学試験では、34名が受験し、14名（国際関係学専攻6名、比較文化専攻8名）が合格した。

これまで何度も書いているが、「今の学生は勉強をしない」という声には、果たしてそうだろうかと思う。もちろん、疑問を感じる学生もいなくはないが、講義・演習ではかなり厳しい課題を出し、議論でもあえて容赦ないコメントを述べているので、修士課程一年生の中には、多少面食らう者もいよう。しかしながら、それでもほとんどの学生が、そうした課題をきちんとこなし、一念発起して授業や論文執筆に取り組んでくる。実際、私はもとより、周辺の同僚に聞いても、私語で授業が進行しないと、課題をやってこないという話はほとんど聞かない。学生が勉強しないと、授業中の私語は、主として教師の側に責任があると思う。

# 環境科学研究所の動き

環境科学研究所長 相馬 光之

環境科学研究所は13研究室の小さな組織であるが、大学の附属研究所として、基礎的な研究、教育を行うとともに、環境問題が研究機関になげかける多様な課題に応えるために、とくに地域社会の環境問題の解決に貢献するために、いくつかの活動を研究所の事業として行っている。前回（平成12年3月）報告以降の動きを紹介しよう。

## 1. 研究室公開（6月24日）

大学院に進学して環境の研究を志す学生を主な対象として、各研究室で行われている研究の生の姿を紹介している。昨年につづき、来訪者は30余名にとどまっており、研究所（環境物質科学専攻）への若い人達の関心を一層呼び起こす活動が必要になっている。

## 2. 研究所公開（8月19日）

県民の日（8月21日）関連行事として、一般県民を対象に、多くの人に参加しやすい土曜日を選んで開催した。今年は、工業高校生が授業の一環として見学に訪れたり、同日に行われた県民カレッジ講座（次項参照）の受講者の参加もあったため、来訪者は250名に達した。各研究室が工夫したデモンストレーションには夏休みの小学生を中心に大勢がつめかけ、それぞれ好評で、子供の歓声が聞こえたり、研究所の普段とは別な活気が新鮮に感じられた一日となった。

## 3. 静岡県民カレッジ「環境学習サポーター養成講座」（8月5日～12月2日、全10回）

県教育委員会に協力して、昨年までに東部、西

部と開催されてきたこの講座も今年の中中部で一旦完結する。私達の研究所が会場に選ばれたところ、従来に増して受講者が多く、盛況裡に行われたのは嬉しいことであった。

## 4. 環境研究交流しずおか集会

研究所の発足（平成9年）とともに、県内の産・官・学・民にわたる自由な研究交流の場として、テーマと開催形態を毎年少しずつ変えながら継続している。今年度の第一回全体集会は、集会の世話人会を分担している県環境衛生科学研究所に協力して、環境庁・全国公害研究所協議会主催、環境保全・公害防止発表会（会場本学）における環境と微生物に関するシンポジウム（11月21日）を協賛する形で行われた。大講堂が埋まる盛会であった。第2回の集会は年が明けてから、自由な研究発表の会として開催するべく準備が進められている。学内外からの多数の参加を期待している。



5. このほかの重要な活動は以下の通り。

外部から講師を招いて随時研究所特別セミナーを開催している。その一部については上記しずおか集会の企画としても、その連絡網を通して広く参加を呼びかけている。小学生の一日環境学習（10月2日星美学園小学校5年生）では、きれいな水と環境について科学的な体験をする機会を提供し、子供たちに大層喜ばれた。

今年度から、所内助手の共同研究の活性化を目的として「環境科学研究所奨励研究助成」を始め、3課題を採択した。新しい研究の芽を育てる試みとして今後の発展を期待している。

次いで人の動きと国際協力・交流の現況を紹介する。助手2名がそれぞれ他大学、研究所に栄転、1名が着任した。日本学術振興会外国人招へい研究者（ニュージーランド、本学客員教授の称号を授与）、同特別研究員（ポーランド、中国）を迎え、共同研究を行っている。また国際協力事業団（JICA）の研修員をブラジルと中国から受け入れている。環境の研究機関としては、このような外国の研究機関から派遣される研修員を積極的に受け入れることも大切な役割なので、これらの方々の学内での身分を保証する方法が、早急に具体化されることを望んでいる。研究所からは、例年の長期海外研修（3ヶ月以内）による派遣のほか、助手1名が1ヶ月間ベトナムに派遣され、環境微生物の分析指導に貢献した。



環境科学研究所一般公開：何が見えるかな



## 付属図書館の動向 ～大学図書館における相互協力について～

付属図書館長 志田 直正

本学附属図書館には約29万件の図書館資料（図書、雑誌、視聴覚資料等）が所蔵されていますが、学生、教員の教育、研究に資するためにはまだまだ不足しています。

しかしながら、情報化・国際化時代を迎えて、学術情報量の増大・研究分野の拡大・国際化が進む状況のなかで、いかに大規模な大学図書館であっても教育、研究に必要なとするあらゆる資料を一つの大学でまかなうことは不可能になっています。

そこで、この解決策として各大学図書館が所蔵する資料を一定のルールのもとで互いに利用しあうこととしたのが大学図書館相互協力であります。

相互利用にあたっては、最初に必要とする資料が本学附属図書館に所蔵されているかいないかをOPACなどで調べていただき、所蔵されていない場合は図書館のカウンターに申し出てください。

図書館では必要とする資料が、どこの図書館が所蔵しているか国立国会図書館、国立情報学研究所などのデータベースから探し出します。資料は必要に応じ次の3つの方法で利用することができます。

訪問して直接閲覧を希望する場合は

本学附属図書館が発行する紹介状と学生証を持参して、所蔵する大学図書館を訪問し、閲覧することができます。

閲覧にあたっては、訪問した大学の指示に従ってください。

借用を希望する場合は

必要とする資料を本学附属図書館が、他の大学図書館から借り受けて申込者に提供しますが図書館内での閲覧のみで、複写はできません。

また、資料の往復に要した郵送料などの費用は実費を負担していただきます。

文献の複写を希望する場合は

文献複写申込書に必要事項を記入していただき、図書館カウンターに提出していただきます。

図書館が他の大学図書館に複写を依頼し、申込者に引き渡しを致しますが、複写できるのは著作権法の範囲内ですので注意して下さい。

また、複写代金、郵送料、払込手数料などの費用は申込者の負担です。



以上の他に、3キャンパス相互利用（本学附属図書館、短大部静岡校、浜松校）制度があり、これは、平成11年度から、開始したものでありますが、利用者カードを持参して訪問すれば閲覧、貸出ができるが、訪問しなくても所属図書館に申し込めば取り寄せることができる相互利用であります。

相互利用の件数は年々増加しており、特に、文献複写依頼の件数は飛躍的に増加しています。

このことは、昨今の県財政逼迫のあり、図書館資料の収集が思うように進まない中で、増大する学術情報、拡大する研究分野に対応していくためには相互協力の必要性がますます高まってきている現れであると思います。そして、本学の学生、教員はそれだけ教育、研究に熱心であるとの証しでもあると思います。

また、静岡県図書館協会からは、「静岡県公共図書館等の資料相互貸借に関する協定」に加盟してほしいとの要望があり、平成13年1月から、これに加盟することとしました。

これは、県内の市町村立図書館、公民館図書館等との相互利用を図ろうとするもので公立大学としてその施設の機能の一部（教育、研究に支障のない範囲）を一般住民にも提供していかなければならないものと考えたからであります。また、市町村立図書館等では、本学に所蔵されていない地域の郷土資料を多く所蔵していますのでこの方面に興味のある人には利用をお勧めします。

相互利用の件数の増加は図書館職員の業務に大きな負担になっていますが、学生、教員の教育、研究に少しでも役立てばと思い頑張っています。

最近の相互利用の実績

相互利用の方法		平成10年度	平成11年度	平成12年度 (4月～11月)
閲 覧	本学が発行した紹介状	97件	88件	60件
	本学を訪れた他大学の学生・教員	113人	103人	133人
借 用	本学が借受けた件数	17件	19件	30件
	本学が貸出した件数	1件	1件	5件
文献の複写	本学が複写を依頼した件数	2910件	4332件	3874件
	他の大学から依頼を受けた件数	376件	470件	313件
3キャンパス	短大部から借受けた冊数		32冊	51冊
	短大部へ貸し出した冊数		98冊	92冊

\* 3キャンパス相互利用は11年度から開始

## 研究助成の採択

トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成金

「スマトラの学校時代 あるキリスト教徒の思い出」

[原著インドネシア語からの翻訳・出版]

翻訳者 短期大学部文化教養学科 講師 池上重弘



## はばたき寄金からのお知らせ

12月末現在の寄金残額 4,452,623円

[前号以降の寄附者(教職員敬称略)] 寄附金総額 840,000円

教職員	(食品栄養科学部)	中山勉	匿名希望者(1名)
	(環境科学研究所)	富田多嘉子	岩堀恵祐
	(事務局)	匿名希望者	(1名)
学外	静岡県建築士会様	静薬学友会様	(静岡県立大学薬学部同窓会)
	静岡県立大学互助会様		

(8月3日から12月末までの分)

## 新刊案内

本学関係者著書紹介

森田 克徳 著 (経営情報学部講師)

『争覇の経営戦略 製菓産業史』

慶應義塾大学出版会 11月8日発行

著者は、8年間ほど、製菓企業においてセールスに従事した後、僅かでも多く社会貢献を果たしたいといった大願により、同社を退社して、学問の領域に戻った。そして、製菓業界の本格的な研究に着手し、森永製菓の創業者である森永太郎と実態として経営を担った松崎半三郎の国家国益思想に共感を強く覚えたことがきっかけとなって、本書を著すこととなった。

本書は、「調査の徹底」、「歴史的事実の跡付けだけに終始しない」といった考えを基本コンセプトとし、大きく4つの部と「序章」・「終章」の2つの章により構成される。

第 部は「森永製菓の制覇と後発企業 創業から第二次大戦期」、第 部は「明治製菓の躍進と各社の経営行動 第二次大戦後から1970年代中葉」、第 部は「ロッテの制覇と各社の経営行動 1970年代中葉から90年代」、第 部は「争覇

のファクト・ファインディング」である。第 部から第 部にかけて、製菓企業の経営行動を、できる限り、実態に即して、跡付け、検討を加えている。第 部において提起したLMS(ロジスティック・マーケティング・システム)は、「消費選好情報を集積のうえ、分析して製品開発に活かし、消費者が欲しい製品を、欲しい量だけ、欲しい時に、適正な価格で、迅速に供給して販売する」システムである。LMSは、生産、販売、マネジメント、人事制度と紐帯した人材育成等、あらゆる機能が連動したシステムであり、経済・競争・市場環境に変通した「自動革新化メカニズム」をビルトインしたシステムなのである。

LMSは、ますます加速化する消費選好の変化を起点とした経営革新という視点からすると、企業経営における「効率」と顧客満足度の上昇といった「効果」の両立を図る新たな経営システムを、デザインする試みの1つととらえることができよう。



## 大学評価に関する研修会開催

大学評価に関して、第3者評価の導入や、大学評価・学位授与機構の発足による国立大学への評価の開始など、様々な動きがある。本学における大学評価を実施するにあたり、最新の動向を把握し、今後の方針を検討していく参考にするため、大学評価に関する研修会を12月15日に開催した。研修会の出席者は各部署局長、評議員、大学評価委員会委員。

研修会は天野郁夫国立学校財務センター研究部長が講演を行った。天野郁夫氏は、名古屋大学教育学部助教授、東京大学教育学部教授を経て、現職を勤めている。

「大学評価と教育評価」と題した講演では、98年の大学審答申により大学の第3者評価機関が設置されることになり、大学評価・学位授与機構が発足、評価チームが組織されまず国立大学の一部学部から評価が実施されることが紹介された。

日本の大学の評価システムが戦後教育改革から現在まで変化してきたことが、アメリカの多面的評価システム、イギリスにおける国家による評価システムと比較しながら説明され、大学評価の中でも特に教育評価については、イギリスにおける評価の方法、国内における学生による授業評価が紹介され、評価方法の問題点や課題が示された。

講演終了後、出席者からは、活発な質問が出され予定時間を越えて質疑応答が行われた。



## 有馬元文部大臣が本学で特別講義

本学国際関係学研究科における大学院特別講義として、有馬 朗人元文部大臣が12月12日に「俳句からハイクへ」と題して講義を行った。有馬先生は国際俳句交流協会顧問で、俳人「天為」を主催している。

講義は比較文学の立場から日本と外国を比べ、神と自然科学の対比、一神教と多神教の違いによる言語の違いから講義を始め、詩における東西の違い、正岡子規とチェンバレンの詩に関する論争を紹介し、俳句と詩の比較についての歴史的な背景を解説した。

また、国内における現代詩と俳句のお互いへの影響を示しながら、俳句の特徴を説明した。また海外の現代詩に与えた俳句的発想の影響を例示し、国内だけでなく海外への俳句の影響も示した。

最後にハイクを通じて世界に話をしていくことにより、日本と外国の違いを理解し、共通点を理解することもできると講義を締めくくっていた。



## 『県大の万葉植物・ツバキ』

県立大学構内は、『万葉植物の宝庫』である。かつて女子大があったとき、いまのシンボルタワーあたりに『万葉植物園』があったほどだ。

よく目につくのは、椿である。万葉時代は、ツバキとサザンカと一緒にされており、欧米ではいまもサザンカをツバキに含めて扱っている。

ツバキは、日本原産で、野生種は関東以南の太平洋側に分布するヤブツバキと、福井から秋田県の日本海側に広がるユキツバキに分れるが、県立大学にあるものは、前者の系統で、大講堂付近にあるものは、すべてこれである。

『巨勢山（こせやま）のつらつら椿

つらつらに見つししのばな

巨勢の春野を』（巻一の54）

巨勢山のつらつら椿を、つくづくと眺めながら巨勢の春野を思い出していますという意味で、持統上皇が大寶元年（701）の九月紀伊の国に行幸なさったとき、坂門人足（さかとのひとり）が詠んだ歌である。巨勢山は奈良県御所市にある。

<中国語では山茶花>

つらつらツバキとは、花が連なり咲いている様子をいう。万葉集には、椿の歌が九首ある。ほとんどが山椿をうたったものである。平安時

## 谷田風土記

代から庭に植えるようになったようだ。

ところで、椿は日本生れの漢字である。『古事記』では都婆岐、『日本書紀』には海石榴とある。海石とはザクロ（安石榴）のことである。海とは外国という意味で、外国から来たザクロになる。

中国語で椿という漢字はセンダン科の香椿（シャンチュン）と言う全く別の植物のこと。ツバキのことは『山茶（シャンチャ）』という。野生の茶という意味である。また山茶花、海石榴、千葉紅、鶴丹、耐冬花の字があてられる。日本語の山茶花（サザンカ）のことは、茶梅（チャーメイ）といい、混乱している。

実物を見ないで、漢字を充てたときの名残りであろう。なおいま学術用語では、植物の名前はカタカナで表記することになっている。これから大学内のツバキがきれいに咲く時である。

（国際関係学部教授・高木 桂蔵）



67

## モスクワ国立国際関係大学グレヴィッチ教授来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）よりタチャーナ・グレヴィッチ教授が、12月27日来日した。

グレヴィッチ教授は、MGIMOで日本語・朝鮮語・モンゴル語・インドネシア語学科科長を勤めている。本学における研究テーマは「日本とロシアにおける外国語としての日本語教育方法の比較検討」で2月初旬までの1ヶ月半の間、本学に滞在し研究を行う。

受入教員は島田孝夫国際関係学部助教授が勤める。なお研究テーマの専門分野に係る国際関係学部のロシア語、日本語の教員が研究に協力する。

グレヴィッチ教授は、平成6年度にMGIMO助教授として本学に1ヶ月間滞在した経験がある。今回の滞在中図書館での資料収集、文献の調査、教員とのディスカッション、関係機関への訪問等により研究活動を進める予定である。

